5×0＝測定不可能

パウリの甥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
５×０＝測定不可能

【Ｎコード】
Ｎ２３０９ＢＡ

【作者名】
パウリの甥

【あらすじ】
何の接点もない、表の学生（レベル０）と裏通りの女王（レベル５）が邂逅するとき・・・・物語は始まる・・・・

原作では余り明らかにされていない”超能力”や”原石”について独自の視点で迫っていければなと思います。

Phase 1．0：encounter（前書き）

この作品を読んで頂きありがとうございます。

初めての禁書連載ものです。

温かい目で見てもらえればうれしいです。

それでは、どうぞ！！

Phase 1．0：encounter

歴史というのはその点ごとに様々な”分岐点”が存在し、どれを選ぶかはその時を刻む人間たちの判断に委ねられる。

故に、偶然起こったともいえる出来事はそのときに選んだ道を進んだ結果でもありそれは偶然の産物ではなくむしろ必然性を孕んでいる。

裏を返せばどれもが可能性のうちの一つではしかなく、どれもがどの次元の平面上の正規の歴史といえる。例外はそこには在りはしない。

これは、可能性の一つに過ぎないだがこの空間での正規な歴史だ。剪定を間違えたのではない、そう選んだにしか過ぎない。そんなある物語・・・・

これは、路地裏の女王（あんぶのめるとだうなー）と平凡な高校生（いまじんぶれいかー）の取るに足らないお話・・・・

上条当麻は、不幸な男だ。その具体例を挙げるには本人の一日の行動を具に見なくても分かる。

目覚ましをセットしたのに時計が都合よくバッテリー切れ。何とか奇跡的に起床するもの通学途中に宿題を家に置き忘れたのに気づき戻った矢先、”落し物”を踏んづける。何とか奮い立って、家路を急ぐも信号待ちをくらいランニングポーズで待機モードに入っているところにトラックが突っ込む。間一髪で避けたと思えば荷台に積んでいたタバスコを盛大に浴びて全身辛みに痺れたりと・・・・

不幸というよりも恐らく自虐ネタで一時世を席巻した落ちぶれホスト並みのドジな人間だ。

あっ、声が聞こえる・・・・回転しないミラーボールの下で

「とうまです・・・今日は、・・・・」

悪友、でもあり”デルタ・フォース”という”変態”的な意味でつるんでいる土御門元春に言わせれば自分と同じ金髪にすればきっとその芸人よりかは儲かるかもしれないと肩を叩きながら盛大にからかわれ、

デルタ・フォースの方翼をになう青髪ピアスの学級委員長（男）に言わせれば、上やん属性を考慮にいれればその程度の不幸で差し引かれてもお釣が出るくらいに上やんは幸福もんやとのたまっていたが、当の本人は何を言われているのかさっぱり分からず。結局それが青髪学級委員長の怒りを買ってしまい昼休みの学食によって上条の財布から女性文豪が消え去ることになったのだった。

「・・・所持金、残り２１０円・・・・」

初夏に差し掛かり流石に学ランが単なるサウナスーツにしかならなくなった今日この頃。特殊な右手を持っているが特別モテ度が上がるわけではなく、むしろ無自覚なほどに旗立てが乱立するのみ、テストをやっても担任である月詠小萌先生の閻魔帳には最初の小テストから補修の常連として殿堂入りをしてしまい表彰ものになってし

まう・・・・

でも、本人はこんな右手を持っても不幸をマンネリの如く受けても他人を助け、その笑顔を見るだけで満足するような実に損な男（レベル０）でもあった。

腹の虫も鳴りそうな夕暮れ時・・・完全下校時刻も迫りつつあるが育ち盛りの高校生には今頃は丁度何か摘みたいと思うころだ。だが、万年謎の金欠状態から抜け出せないこの少年にとっては何か買うのもままらない。

嗜好品や娯楽の類は、滅法高いこの学園都市ではファストフードを買うのも一苦労だ。

そんな時ほど、自分のレベル（がくりょく）を恨んだことはない。けどほんの少しだ・・・いや、ほんの少しかは本人の聞くどころにもよるが・・・

取りあえず、ツユだくたっぷりな牛すき焼き丼は前までは特盛をワンコインで頼めたが昨今の”食の安全”問題はこの学園都市にも来ておりメインの仕入先変更による余波で値が上がっていた・・・

仕方なく適当にコンビニへと向かうとそこには「おにぎり全品１００円セール！！」というポスターが大きく張り出せれていた。

これぞ、渡りに船いや天からの恵み・・・日頃不幸続きの上条さんを神様が憐れんで施しなさったお陰・・・・日頃信じてもいないに神様（しすてむ）に感謝の祈りを心の中で捧げおにぎりコーナへ足を向けた。

それから暫く戦利品を小脇に・・・ではなく片手に少年は少々浮かれ気味だった。手にしたものは”サーモンわさび味”のおにぎり一つ、それに日本茶。流石に、これだけでは足りないのだがないよりかはマシだしなんていたってそうそうないおやつ（こううん）なのだから・・・

でも・・・・

―ザシュッ―・・・・・―ドサッ―

「どうしたんだ？」

路地裏での出来事が分岐点ならば・・・・

そこで、違う道を歩んでいたならば・・・・

きっと、私は今みたいに変われたんだろうかしらね・・・当麻・・・・

少年は今しがた通り過ぎた路地裏から聞こえる物音に反応した。路地裏・・・そこは学園都市の違う意味での”出入り口”。無能力者（アンチスキル）集団をはじめ様々な闇が介在し巣食っているならず者達の世界へと誘う”門”。

自分も何回か”偽善”という名の人助けをこの路地裏で繰り広げた。ある時は戯言で、ある時はその右手（あくま）で・・・勿論、簡単にいく事はない。ただ、そこで苦しんでいるものに対しては見逃すことができない。その人に笑ってほしい・・・それが、上条当麻なのだから・・・

路地裏に入ると、そこは表通りと違ってひんやりしていた。上条の想い（けつい）など簡単に寄せ付けずまるで蝋燭の火の如く吹き消しかねないように・・・・でも、少年は拳を握ると音がした方向へ慎重に歩みを進めていった・・・・

そこには・・・・

―血溜りの中で暗部の女王(むぎのしずり)が横たわっていた―

5×0＝測定不可能

Phase 1. 0：encounter

麦野沈利は完璧な少女だ。いや、完璧主義者だ。厳密に言えば・・・・

カールして柔らかな栗毛に面長で彫の深く美しい顔立ちと切れ長の目に、形のいい唇。スタイルもメリハリよくどこかのグラビアアイ

ドル顔負けものである。

所作にも隙がなくそれなのにどうして端々に気品と優雅さがどこか漂っている。紅茶を飲むにしてもやはり周囲の人間とは一味違った雰囲気を与える。

勿論、外見だけではない。学園都市に7人しかいないレベル5（ちょうのうりょくしゃ）の第4位を冠する高位能力者。その序列は一重に研究価値と演算能力によって決まるもの。

故に、その演算能力の高さゆえに頭脳に関しては折り紙づきである。また、好奇心旺盛な部分もあることながら、知識の偏りをなくすためにも文芸誌から科学ジャーナルまで隅々に目を通し教養をつけることにも余念がない。

また、暗部に身を置くものとしてそして男たちに舐められないためにもジムで体を鍛えるとともに徒手空拳も体得しそれを磨き上げるごとに余念がない。

ここまで完璧を目指してどうなる？というのが凡人の考えだが、麦野沈利にとってはそれが常識。全ての可能性を高め向上させどれひとつでも相手より優れ、完璧であることに心の充足感を見出していた。完璧であること、それは自身の序列、第4位（ぷらいど）によるところが大きい。その対象は自身の能力開発にいたっても同じことが言える。

能力の吐き出しでもありその人物の人格形成をなす核である”自分だけの現実”・・・

麦野の自分だけの現実が常に完璧であれと指示する関数なのか、それとも完璧という名のプライドの結晶が自分だけの現実を形成するのか？

卵が先で、鶏が先なのか？そんな陳腐な命題は意味を成さないがどこか心の奥底でひっかかる・・・・最近そのことが気がかりで仕方がなかった。

それを最初に想起したのがほんの2週間前に行われた身体検査（しすてむすきゃん）だった。

レベル5ともなれば、自分の能力のピークを迎えてしまっているためこのような定期的な検査は日頃こなす実験よりも味気ないものだ。

毎回の実験の度に、こまめに自らの能力の規模・威力・適用範囲といった自身の力は把握（すぺっく）している。

だが、この一年間の成果を総括し反省点を洗い出すにはいい機会だと認識していつも身体検査をしている。完璧であるが故に、自身の能力開発にも一切余念がないのである。

それは、まだ壁という壁にぶち当たったことのない、袋小路にはまったことのない実に挫折というものに縁がない、無垢な姿そのものであった。

学園都市に連れられて能力が解析されて以来ずっと測定担当の研究委員が告げた「レベル５」の声・・・・・しかし、今回は違った。

「ただいまの計測値、波長：～，光子エネルギー量：・・・・・・，射出速度：×××総合判定・・・・・・えっ？」

「どうしたのかしら？もう測定は終わったのよ、それともまたこのドデカイ奴もう一回ぶっ放せっていうの？なら、時間の無駄をしたことだし相当高く―「・・・レベル判定不可能です」―は？」

麦野には一瞬、研究員がいっていることが理解できなかった。そうか、これはなんかのジョークであり、もしかしたらたちの悪いドッキリかもしれない。そういえば、自分より何故か序列が上である御坂御琴は最近学園都市広告塔としてメディア露出も甚だしい・・・もしかしたらそのお鉢が自分に回ってきたのか？こんな血に染まり血で購い、血で日々の生業を得ている自分にとっては嫌な役割りだが・・・・とか

彼女にしては無駄なことを考えていたようだ。それでも、麦野の声に気圧された研究員は額に汗を浮かべつつも同じ言葉を繰り返した。

「・・・いえ測定結果には間違いはありません。・・・・もう一度いいます、被験者麦野沈利。あなたのレベル判定は”なし”です。」

少女は秀麗な眉を八の字にする前に唇はかすかに弧を描き嘲笑にも似た眼差しをしかも、その裏にはしずかな怒気と渦巻く狂気を乗せてこう言った。

「何の冗談かは知らないけど、もうちょっとマシでしかも笑えるものにしなさいよね。それに、そんなことを言えるぐらいにあんたは偉くなったのかにゃーん？まぁ、今は気分もそこまで悪くないからちゃんとした結果（のうりょくはんてい）を言ってもらえればそれでいいから・・・」

沸点が低く暴走したその様は少女（ヴィーナス）から修羅（キマイラ）へと瞬時に姿を豹変させる。故に、暗部でも研究班でも彼女は恐ろしい存在として認識されているため彼女の一言は必然大きなものへとなる。そう簡単に御しきれるものではない。それが、この”世界”での不文律であった。

だが、この若い研究員は配属されたのがほんの2週間前。もともとが学園都市の”表側”に住まいし住人だったこともあり、研究対象である彼女を単なる能力者（ちょうのうりょくしゃ）としてしか見なしていなかった。

故に大きな過ちを犯す・・・

「君は、何様のつもりだ！！」

研究員は至極、年長者として当たり前の行動に出た。そう、叱責したのだ。目上の者が若輩者の無礼を叱り正すが如く。だが・・・

「・・・お叱りいただきありがとう・・・・科学者のお・に・い・

さ・ん・・・」

ストンと心地よく落ちる感じ・・・そう、ただの超能力者麦野沈利から暗部の女王（じぇのさいだー）へと切り替わる瞬間が彼女は最も快感を得る刻であったし、

「・・・・ふーん、そうなんだぁ・・・・・残念ねぇ・・・・」

「何が残念なのかね！？論理的に正しくもって説明してほしいもんだね」

科学者の怒りはまるで滝のように迸る。身に任せ、思うが侭に・・・・

「こういうことよ・・・・いち、にい、さん、どばーん！？」

左手を翳す、無表情にそして無感情に・・・

―・・・一閃・・・・―

原子崩し（めるとだうなー）・・・不安定な原子の収束体が生み

出し光の光芒・・・

空間を切り裂き周囲の残ったのは大破した測定機械と各計器から飛び出たスパーク・・・そして、少女の前には・・・・・

膝立ちになった研究員だったモノがそこにいるだけであった。

警報機が鳴り、研究ブースは騒然。研究員一同、事後処理に奔走している。先ほどの一撃で研究所内の電力配給システムが誤作動しているそうだ。お陰で身体検査は中止。全く、科学の街という謳い文句の割には相変わらずラインやコネクタリングの脆弱性ばかりが目に付く。

そういったどうでもいいことを頭の片隅に追いやると、喧騒をコンソールルーム兼能力者控え室の窓から覗きつつ紅茶を飲んでいた。今日は、香りからしてアールグレイのようだ。

湯気から立ち上る芳醇で優雅な香りを楽しみ、紅茶独特の苦味ではなく上品な酸味に控え目な甘さに戯れていると、今回の元凶を作った科学者が入ってきた。

「おうおうおう、やってくれるねぇ？原子崩し、今日はやっぱあの日なのかぁ？」

「相変わらず、その腐った刺青顔を私に向けるとはね？本当にどうしてくれるのかしら、木原数多・・・元々は予定（スケジュール）に組んでいないことを無理にねじ込んだのはアンタでしょ。どう、落とし前をつけてくれるのかしら・・・それと、女性に対しての発言がなっていないわよ。どういう神経をしているのかしら・・・」

木原数多と、呼ばれた長身で細身、白衣を纏い顔の右側にはタトゥーをいれた男は白衣に両手を突っ込み肩をすくめた。

「まぁまぁ、魅力的なかっこうは認めるがとてもお前には研究価値以上のモンは見出せねぇ。女なら、ほかに間に合うからな・・・・。まぁ、いい。今回の実験はお前さんの能力の新たな可能性を試すためだぁ。」

「それが、測定不可能のレベル”なし”ってわけ？意味不明よ。そもそも、私の能力は原子そのものを不安定にしそれを量子力学的に則た運動・挙動を操るものでしょ？確かに、量子の非対称や破れによるエネルギーの拡散を研究にする足がかりにはなるかもしれないけどね？」

「確かに、お前の能力は件のパーソナルリアリティに反して不安定なものへの変化という矛盾したものだぁ・・・・だがな、それを安定してより完璧なものにすることも可能なんさぁ・・・」

麦野は表層では無関心、を装っていたが内心では冷や汗をかいていた。自分のパーソナルリアリティ（かんぺきしゅぎ）に反してそれによってなされた自らの能力は”原子崩し”。物理力学に則るものの扱うものは不安定状態の粒子操作だ。完璧な関数が弾き出した結果が、実は不安定な虚数解・・・・

麦野は、前に呼んだ自分だけの現実に関する論文の一説を思い返す。そこには、能力そのものがパーソナルリアリティによるところは間違いなく、カリキュラムをこなすことでその演算能力の向上、能力範囲の促進・増強は見込まれる。だが、・・・

「能力そのものは必ず演算プログラムを元にそれを脳神経を伝達することで忠実に再現される。それは、レベルの上限にかかわらずしかも演算スピードおよび他のパラメータには依存しない・・・・・・箱型理論（パーソナルファンクション）だったなぁ・・・・」

眼前の男はそれをいうとニヤリと品のない笑みを浮かべた。その目は今の麦野の心の奥底までを見透かすような、暗く冷たいものだった。

ただ、彼女もだてに暗部の組織の長を務めているわけではない。修羅場もそれなりに潜り抜けてきた。心の中にわきたった漣を無理やり押し込んで平静を装う。

「っで、それがどうしたっていうの？」

「まぁ、落ち着け。要するにお前さんには二つの可能性がある。ひとつは、お前の箱型は恐らく感情の揺らぎもない完璧のもの、ただ何らかの原因でコードから能力を出力するさいに外的な因子で結果が揺らいでしまう。」

「・・・・・もうひとつは？」

「へぇ、俺の話に興味をもつとはな・・・・意外だねぇ・・・まさか、俺が言ったようなことに心当たりがあるのかい？」

「いいから、話な。私の気が変わって、お前ののど笛を掻ききる前になぁ！！」

感情の爆発をまるで流れ作業の如く右から左に流す。別段驚くこともなく淀みなく話を続けた。

「・・・・はぁ、相変わらずの狂犬ぶりでぇ。まぁいいや、次の可能性なぁ、関数そのもに重大な欠陥がある場合だ。吐き出すソースコードが不十分になり結果そのものも狂ってしまう・・・そういうこった・・・ただ、その箱型をバラすわけにもいかねぇ・・・俺としては大切な素材（モルモット）に傷がついては困るんでねぇ前者の方がいいんだが、後者の場合では新たなパーソナルリアリティの移植が可能になる・・・それも独自のだ・・・それはそれで、そそられるんだが・・・」

「その可能性とやらがさっきの測定結果に影響を与えているって言うの？」

「そうとは言い切れない部分もある・・・だが、未知なる理論の解明だ。おもしろいだろう・・・それに、こいつの解析結果はもしか

したら興味深けぇことになるかもしれねぇしなぁ・・」

木原は今回の結果に対して早速いくつかの仮説を立て始めたようだ。

一方、麦野はさっきの話を反芻しながらも先ほど原子崩しを放った左手を凝視していた。あの時放ったのはいつもと同じの低出力のもの・・・感情が高ぶってもいないのに威力は高出力並みにすさまじかった。

周囲の破損の仕方も不自然だ。本来なら、あれほどの威力を放つと周囲の対象物を巻き込んでしまう。だが、器具の壊れ方は一部の部分がきれいに刈り取るように吹き飛んでいた。言い換えれば、「どこかに飛んでいった」というのが正しい表現だ。

それに、研究員の死体もだ。溶解し高温で蒸発するにしても余りの威力に影が下に映りこむ。だが、影はない。まるで研究員の上半身が蒸発（消え去った）したようだった。

極めつけは、実験ブースとは独立したユニットでのシステムエラー・・・・

何なのかは現段階では皆目検討つかなったが自分の不安定さによって何か引き起こされたのではと潜在意識下でそう感じていた。

その姿を見ていて木原は厭らしい笑みを浮かべていた・・・・

Phase 1.0：encounter（後書き）

此処まで読んで頂き有難うございます・・・・

若干口調や科白回しが不自然かもしれません・・・・

ご意見・感想待ってマース！！

Phase 2.0:draft（前書き）

お気に入り登録、感想の方有難うございます！！

とても励みになります！！

今後も「5×0」を宜しくお願いします。

では、最新話どうぞ！！

Phase 2．0：draft

あれから二週間がたった・・・・能力そのものは安定しているが違和感は拭えない。幸い、大きな仕事は来ないが早くあの刺青科学者に原因を探ってもらいたいものだ。

仲間には悟らせないようにはしていたが、悩みに苛まれ不眠状態が続く。仕方なく、前日に市販の安定剤を服用したがあまり効果もなく今日も、眠気の残滓が残るままカーテンから漏れる朝日を浴びることになった。

5×0＝測定不可能

Phase 2．0：draft

考えても仕方がない・・・朝の寝起きにシャワーでも浴びるかと思ってクィーンサイズのベッドから抜けだす。椅子にかけてあったバスローブを素肌に羽織り脱衣所へ向かう。

お気に入りのシャンプーとボディーソープを取ろうと洗面台の戸棚に身を伸ばそうとすると、リビングに置いてあった携帯が鳴った。

特徴的な着メロ・・・着信相手が分かりゲンナリする。こういう朝にはかかってほしくない相手(じょうし)だ・・・・

「・・・・ッチ、一体なんのようだ・・・・」

心ではワン切りしてやろうと思ってノロノロ動こうと思うが体は反比例して自らの携帯に向かって歩みを早める。その様にあきれ半分、苦笑半分・・・・・

とりあえず、電話をとる。

「・・・・・お掛けになった電話はただいま、―「コイツときたらー!!」―うるせぇよ、一体朝から何のようなんだよ・・・・・」

電話の相手は麦野が所属する暗部の治安維持部隊「アイテム」の上司、通称”電話の女”だった・・・

「はいはいはい、朝早くから元気だねぇ、しーずりちゃん!!どうかな具合は、それじゃあ、仕事にいこっかぁ?」

「ごめん、パス・・・・今日は寝てないから・・・・」

「コイツときたらー！！最近眠れないから言って何軒もハシゴした挙句安定剤飲むなんてね。頼むよ、レベル5が睡眠薬自殺なんてしたらぁこっちが大目玉なんだからなぁー。それと、お酒はハタチになってからだゾ☆いくら、顔パスでもだめだからな！！」

「ひとの年齢に関しては言うんじゃねぇ？穴あきにされてぇかぁ？それとも、真っ黒ジュウジュウ焼きゴテの刑だってかぁ？」

「はいはい、エアーカツアゲ乙ー。まぁ、そんなことは置いといて、楽しい楽しいお仕事の時間だよぉ？」

嘆息する・・・・上を見上げるとシーリングファンが回っている。一定の周期でしかも調和を乱さず・・・・世界の本質は輪であり様々な事象は過去におきた出来事のリメイク。人間という階梯に生まれしものはその輪から逃れることは許されない・・・・

なら、私はその階梯に縛られあの羽のように唯、単一的でモノクロな世界で一生を終えるのだろうか・・・・

私の能力も不安定なまま終わりを向かえるのだろうか・・・・

頂きに近づくだけの力も意思もあるのに”天命”という見えない配剤で

頂を上り切ることもできないものは歴史上たくさんいる・・・・

私もその内のひとりになるのか・・・・

「・・・・関係ねえよ・・・・」

「うん、どうしたかな？仕事やる気になったかな？なら、うれしいけどね」

「・・・はぁ、どうでもいいけど早く内容をメールで送ってもらうからじゃあ」

「コイツときt・・・・―「ピッ」―」

一人、思案しても仕方がない。けれども、ただ前を見据えて進むだけ。

そう、それが暗部の女王にして完璧主義者・・・・レベル５の第４位、麦野沈利なのだから・・・・

麦野は携帯をマボガニー材でできた上質なテーブルに置くと、身を清めるためにそして思考を明快にするために再びバスルームへと向った・・・・

だが、麦野沈利はまだ知らない・・・・

これから起きる事が世界の分岐点でもあり・・・・

彼女の軌跡(みらい)を変えてしまうのだから・・・・

第13学区・・・・工業大学実用試験場第12試験場・・・通称「イスカリオテ」

「ここですか・・・今日の仕事場は・・・・」

今回の仕事はある大学で秘密裏に作られた対能力者用の汎用兵器の破壊と、開発関係者の拘束および処罰だった。

いつもなら大掛かりの仕事は、同じ組織のメンバーである絹旗最愛、フレンダ・セイヴェルン、滝壺理后とそれぞれの役割を分担し連係プレーで追い詰める。それが主流だった。

だが、今回は珍しくリーダーの単騎先行だった。その理由は上司曰く「今回は、しずりちゃんに、どーんと突っ込んでもらって、どかーんと奴らの作った物事まとめて吹き飛ばしてもらうのよ、だからあの娘たちは必要ないでしょう？」

だそうだ・・・・・

場所戻って、ここは工業大学の棟同士を結ぶ連絡回廊内。ここは特定の人間しか通らないのだろうかひっそりしている。それとも、敵はわざわざ自分を誘っているのだろうか？

何かがいつもとは違う・・・けど、自分は学園都市に7人しかいないレベル5。その中でも第4位を拝し、指向性兵器を単独で操るならば右に出る者はいない原子崩（メルトダウナー）しなのだから・・・・

やはり、どうにしかしている。当たり前の様な事実で武装して自分を無理にでも鼓舞するなんて・・・まるで弱者が虚勢を張るみたいだ・・・・

仕事の内容だから？「アイテム」の皆がいないから？それとも対能力者用兵器が怖いから？

徐々に負のスパイラルに陥る麦野・・・・・

でも、私は誓った・・・・・逃げないって・・・・・そう、あの子に・・・・

そう言って自らを自然と奮い起こす・・・・自然に表情には不敵な笑みが、女王らしさが復活する・・・

たが、次の瞬間

「ドォン!!」

パンドラの函が開けられる咆哮が聞こえ、麦野は静かに身構えた・・・・

そして待つ・・・・まるで異国の使いが玉間に来るのを待つように・・・・

目的地(いすかりおて)から出てきた異形のモノたちを迎え入れる為に・・・

・

時刻は昼過ぎ・・・これは計画実行前およそ９０分前・・・・

いつものように朝食を抜かしでも、仕事前に腹ごなしをしたいと思い麦野は思案していた。

するとあるコンビニの入口ドア付近に貼られているポスターにふと立ち止まった。

「おにぎり全品１００円セール！！」

お気に入りのシャケ弁を売ってある彼女御用達のスーパーはここからは遠い、それに幼少期からある日々湯水のごとく使っても減らない財力を考えればこんな安物に走る必要性はない・・・・

けど、この日麦野は少し違っていた。何というのだろうか・・・こういったごく普通な学生のマネごとも悪くはないと思ったのだ。

暗部に、学園都市の闇にドップリつかった今ではこうして表を歩くだけでも眩しく感じてしまうことがある。そう、朝陽が目に入り込み先の風景が見えないような・・・・そんな感じがする。

こんな感傷的な気持ちはとうに捨てたはずなのにねぇ・・・どうしちゃったのかしらね・・・・

公園のベンチに座り、先ほど買ってきた”紅鮭”と”わさびサーモン”を取り出し、ビニールの包装をはがして一口齧る。お米とパリッと乾燥したノリ、それに主役の鮭が控えめに自己主張している。

やはり自分は鮭が好きだなぁと改めて思う。花の女子高生にしては中々渋めな好みだが、それでもやめられないのだ。もう遺伝子レベルで刷り込まれている位に・・・・

暖かい日本茶を適度に含み久しぶりに味わうまったりな空気を享受していると、それを引き裂くような声が上がる。

何事かと思いいつもの癖で身構え周囲を見渡す。すると、小さな女の子が何やら泣いているようだ。しかし、時間帯は丁度学生たちが学び舎にいる頃。周囲には麦野以外人は見当たらない。

このまま見て見ぬふりをする訳にはいかない・・・・いつもの姉さ

ん気質が出てきたのか麦野はため息をつきつつもベンチから立ちあがった。

聞くところによると、少女はお昼代のお金を無くした挙句帰り道もわからず迷子になっていたそうだ。
今は、麦野の横で美味しそうにおにぎりを頬張っている。

「おねーちゃん、ありがとう。ぼく、本当にお腹が減ってたから」
と満面の笑みでそう言われると麦野も中々いつもの様な啖呵を切る訳にはいかない。何せ相手はただの子供だ。

「はぁー・・・で、君の名前は？」

「ぼくの名前は、まりっていうの。おかーさんとおとーさんがかんがえてくれただいじな名前なんだぁ」

「女の子なのにぼくって言うんだね？」

「うん！！まわりからはヘンだとかいわれるけどおかーさんは”自分自身を持つことが大事なこと”っていうからぼくはこれでいいんだぁ。」

自称、まり少女の言葉を聞いて少し心揺さぶられる思いがした。自

分はそのことで悩んでいる。なのに目の前の少女はそんなことを一切気にせず”自分である”ことに揺らぎが無い。

まりはカールした栗毛の髪を風になびかせ、黒曜石のような真っ直ぐ芯の通ったでも純粋無垢できらきらした目で麦野を見ていた。

「おねーさん、何かムズカシイ顔をしてるよ？何かあったの？それともどこか痛いの？」

子供は嫌いだ・・・昔から思っていた。小さく発展途上と思ってもこういう感情や周囲の空気には敏感で、それを誰ともなく純粋な好奇心から臆せず尋ねては人の未触領域をどんどん土足で入り込んでくる。

このやり取りの中ではレベルや財力、暗部なのかそうでないかは関係ない・・・・ただの麦野沈利として同じ土俵でやり取りせざる得ない。

でも、こんな感じは久しぶりだし悪くはない。こういう感じることの無い生命の息吹のような子供という無垢な温もりを感じることは・・・・それに、この娘はなんか親近感とそして既視感を感じるのだ。

これが俗に言う、”母性”なのか・・・・・

急に浮かんできた思考を中断する・・・・馬鹿らしい、今の自分とは全くの彼岸の世界だし恐らく一生縁の無い言葉だ。そして目を軽くつぶり軽く息をついてこう言った。

「・・・・そうね、強いて言うなら”自分(こころ)だけの現実”が痛いかな・・・・」

「そーいうことは、おねえーちゃんはさみしいの？それともこわいの？」

「どうだろう・・・・両方かな・・・・まりちゃんはコワイ物とかあるの？」

「・・・・夜にねひとりでトイレにいくのがコワイの・・・・」

苦笑する・・・なんて子供らしい純粋なものだろう。笑っていると、少女はムッとしたのかすこし頬を膨らませて、しょーがないじゃんコワイものはこわいもん・・・といった。少し拗ねているようだ。

麦野は髪を撫ぜてやりながら少女に微笑みかけた。

「ごめん、ごめん・・・ちょっとからかって。でも、コワイ物からはにげちゃいけないよ。自分から立ち向かわなきゃ」

どこの人間がどの面下げて言っているんだろうか・・・自分も逃げてばっかいるくせに・・・・内心反吐が出る。こういう大人の都合のよい見え透いた戯言をまさか自分が言うなんて・・・・

「・・・・おねーちゃん。無理しちゃだめだよ・・・・・」

するとまりがこちらを見据えて静かに言った。まるで有無を言わせないとばかりに・・・・

「大丈夫だよ・・・おねーちゃん強いか―「おねーちゃんも立ち向かわないと。それは強さじゃないよ。」―えっ？」

「どんなに優れた能力者でも、心が弱くては信念が脆ければだめなんだよ・・・・簡単に中から折れて取り返しのつかにことになるよ・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・しんぱいしないで。うーん、こうすればいいかな」

「なっ」

すると少女は原子崩し（むぎのしずり）の首に細くて、幼い腕をまわした。そして耳元で、静かに語った・・・・

「・・・・大丈夫、いつもぼくはおねーさんといっしょだから・・・・」

トクントクンとお互いの心臓の音が聞こえまるでシンクロしてるが如く一定の心地よいリズムを刻んでいる。

熱いぐらいの体温から冷え切って冷感症の心に温もりが送り込まれ、体の芯が温まる・・・・

心地よい・・・・そう、逃げない・・・・自分にもそしてこの先で待っているだろう私にも・・・・

「・・・・ありがとうね、おねーさんうれしかった。」

「よかった!!やっぱりおねーさんにはにっこりわっらているほうがにあっているよ!!」

「私、そんないい顔している?」

「うんしてるしてる!!キレーだよ」

気付けば、口角いつの間にかあがっていたようだ。自分でも表情の変化に驚いている。

「当然でしょ。そりゃ美人さんだからにゃーん?」

「そうだけど・・・・ままの方がきれいかも・・・・いや、ぼくの方がきれいかも!!」

「そんなにまりちゃんのママは綺麗なんだ」

「うん！！けどその口癖ままにそっくりだなぁ・・・・」

先ほど心に巣くっていた白黒写真（ねがていぶなこころ）もいつの間にか霧散していたようだ。

それからは少女と他愛の話をする。好きなお菓子に、料理。そして彼女の話す家族自慢に・・・・

すると彼女はこの昼の弛緩した空気と真綿に包まれたような温もりとに包まれ、それに満腹感から麦野の膝を枕に眠り始めた。

見知らぬ人が見れば絵画にでもなるような美しく、それでいて穏やかな情景だが知る人が見れば吃驚すること間違いなしである。

まるで女王ライオンの懐に子犬が身を寄せ安らかに眠っているようなものだ。

けれども、そこにあるのは肩書や住む世界の違いではなくただの人としての根源的な温もりと温もりの繋がりだ・・・・・

少女の栗色の髪を手で梳きながら自分に子供が出来たらこんな感じの空気を、情景を、未来を感じ取れるのだろうな・・・・とそれを考えるのも悪くはないな・・・・・・・

お昼のたおやかな陽だまりの中、麦野はあの一件以来初めての、し

ばしの眠りを休息を得た・・・・・・・

♪～

携帯が鳴って、意識が覚醒する・・・・・目覚めがいい・・・・・時計を見ると一刻ほど時間が過ぎていたみたいだ。

着信は電話の女・・・どうもメールの様だ。携帯を開こうとすると膝の上に何かおいてあることに気付いた。小さな、花柄のついたメモ用紙と透明なガラス、もしくは水晶の類がくたびれた紐に結えられてできたストラップだった。形状は雪の結晶。

メモ用紙には「おねーさん、ごはんとおはなしあいてになってくれてありがとう！！また、あそぼーね！！まり」と書いてあった。どうも自分が舟を漕いでいるうちにどこかへ行ってしまったようだ。本当に薄情だな・・・と思った、だが彼女と触れ合うことで失っていた何かと今まさに失いかけていたものを取り戻すことが出来た。それには、感謝したかったしそれを口で伝えたかった。

手紙の裏にも何か書いてあったようなのでひっくり返すとそこには

「それは、おまもりだよ！！おかーさんがこまったひとにあげなさいっていったからおねーさんにあげる！！これはまりとおねーさんのなかよしのあかしだよ！！」

「いいのかしらね？こんな血で汚れたオンナがもらっていいものでもないでしょうに・・・」

光にかざした雪のクリスタルは綺麗に輝く・・・ただのスペクトルだけではなくその七色の織りなす調和に心が洗われる思いがした。

何かの縁だ、これを本当にお守り代わりにしてこれからの”仕事”の成功祈願を祈りますか。

そういって淡いピンクの携帯電話のストラップホールに紐を通してつける。うん、中々似あっている。

そのまま着信したメールを開く。そこにはターゲットが行動を予定よりも早くに移したのでそれにともなって開始時間も早くなったとのことだそうだ。

もう少しこの余韻にも浸りたいものだがそうは云っていられない。携帯を畳んでしまうとベンチから立ち上がる。そこにはもうさっきまでの麦野沈利（おねーさん）はおいない・・・その表情に刻まれた凍てつき、妖しい笑みを浮かべるただの超能力者（あんぷのじょおう）だった・・・

工業大学第１２試験場地下回廊

出てきたものは、兵器と聞いていたがそんなはずがない・・・・

あれは本当に兵器なのだろうか？と麦野は思案して走っていた。

追跡してくる敵・・・・

普通兵器ならば、機械などのロボット、ウイルスなどのミクロレベルの生物兵器、戦車や重火器の類を思うだろうし麦野もそう考えたいた・・・・いくらここが学園都市であろうともそういった定義（げんじつ）が当てはまるはずだ・・・・

だが、現実は麦野の予想の右斜め上をはるかに飛びぬけ成層圏を越えようとしていた・・・・

麦野は振り返る・・・・・紫煙の向こう側にいるのは・・・・・

レモン色のガラス状物質でできた原子崩(しぶん)しだった・・・・・・・

「・・・・・目標対ショウ物、麦野沈利(メルトダウナー)を保ゴからセン滅へと認識を切り替エ・・・・承ニン受理・・・・そレでは、作セン１５４から４４４へ移行・・・・準備完リョウ・・・任ム遂行開始・・・・・」

この物語(ぶらん)はただの戯れだよ・・・・・原子崩し(メルトダウナー)・・・・・

誰かが・・・・性別も年齢も分からない人ならざるなにか（マージナルマン）が暗がりの中で呟いた・・・・・

Phase 2.0:draft（後書き）

何とか、書き終わった・・・・・けど、この娘をこのタイミングで出すのは・・・・自分でもないなと思ったり・・・・

感想・ご意見お待ちしています！！

もしよければメッセージでも構いませんよ！！

Phase 3.0:deliver（前書き）

評価、お気に入り登録の方、本当にありがとうございます！！

これからも応援の方宜しくお願いします！！

ではどうぞ！！

Phase 3．0：deliver

「5×0＝測定不可能」

今思えばそれは三流ＳＦ小説にも及ばない・・・

しょうもないでも笑えない話・・・・

惚れた腫れたという程度の恋愛で語れなくて・・・

今は一笑に伏すこともできるけど・・・

あの時は、本当に必死だったな・・・・

こうしている時でも日々大変なことはたくさんあるけど・・・

けどあの時以上に濃密で、凄惨で、理不尽で、全力だった頃は・・・

・

ああ、分かるさ・・・そんな日々にもそして現在にも感謝しないとな・・・・

そうだろう、沈利・・・・・

第7学区・・・とある路地裏・・・・

「・・・・・っえ？」

上条当麻は自他共に認める不幸な男だ。それこそ犬が歩いて棒に当たるような珍しい不幸さえも引っ張り寄せてこれるある意味不幸な人間でもある。

だが、目の前に広がる光景を見ればそんなものは分かる・・・・自分が不幸だの幸運だのとあーだこーだ喚くのではなく行動をしなければいけないということを・・・・

ひんやりとした空気が周囲を覆い粘着で陰湿な雰囲気を与える・・・・都会のコンクリートと言う名の形而上構成物に囲まれその僅かな弛緩した部分に生まれた路地裏・・・・

決まりごとに加え”超能力”という形而下の事象を司る者たちが君臨するこの学園都市にしては、最も醜く原始的で、

粗雑・・・・だが裏を返せばそれは単純かつ開放的な空間でもある。

ルールは単純、己の力量のみが全てと言う野生の動物界同様蛮勇な社会だ。そこを生業にするものもいれば、利用するものもいる、傷

をなめ合い互いに慰め合うものもいれば、やり場のない負の焦燥感を肉体で昇華させるものもいる・・・・いわば、世の中の一番醜悪でもあり皮を剥ぎ、肉を抉り、骨を砕いた先に見える人間(ケモノ)の本質が一目でわかる・・・・そんな場所でもある。

そこに倒れている少女は、そんな世界の住人にやられたのではない・・・・身体を中心にして赤いしみがどんどん広がっていている。刺されたにしろ、撃たれたにしろ、殴打されたにしろ、ひどい怪我であった。

上条は鞄から新しめのタオルを出し、腹部にある銃創らしき大きな傷口にあてがい、圧迫止血をして携帯で救急車を呼ぼうとしてポケットに手を伸ばす。すると、少女が目を開いた。いや、それはゆっくりとまるで雪解けを待ちそこから目を出さんとして震えるような感じであった・・・

「・・・・・アンタ、・・・・なっ何しやがるんだ・・・・・・」

「なっ何しやがるじゃねぇーだろ!!どうしたんだよ、この傷!!これだけの出血量だろう?今何かを迅速にしなければ、お前は助かんねぇーかも知れないんだぞ!!分かってるのか!?」

「・・・・・そうよ、肺と右の動脈がやられているし、脾臓も潰れかかっている。おまけに心臓の左心室も掠めているからあんたがそんな布切れ一つで私のお腹の傷を一つ二つ塞いだところで助かんないわよ・・・・」

「じゃあ、ほっとっけて言うのかよ?」

「・・・・ええそうよ・・・アンタからも分かる通り私は路地裏の住人・・・・アンタみたいな学園都市の住人が関わっていいヤツでもなければそれこそロクなこともないわよ・・・それに、アンタの力何にもできないし、むしろ目障りだわ・・・・」

と言って、少女は強い調子のセリフを詩の暗誦の如く淀みなく発した。だがやはりその声には感情が無いというよりかはむしろ外傷からくる痛みや苦痛で覇気は無く、出血多量による低体温症も引き起こしているのだろうか唇は紫になり体も心なし震えていた。白磁の様な白い肌尚一層白く儚くなっていく・・・・ショック症状も起きているのかもしれない・・・・・。

助けなければいけない・・・・そうしなければ命が失われる・・・・・もう、失いたくないのに・・・・・

でも体は動かない・・・・・

それは、事態が刻一刻悪化していることによる焦燥感や死への少なからずの恐怖でもない・・・

死に瀕していても、それでも損なわれない彼女の美貌に目を奪われていたのだ。

いや生命の危機が迫っているからこそその美しさが一層際立っているのかもしれない・・・・

少年は言葉を紡ぐ

「馬鹿野郎！！なんで、そうやってあきらめるんだよ！！暗部だからだって？そんなの関係ねぇー！現にお前は生きているじゃないかよ！！生きているんだったら最後まで、ほんの数秒さえも足掻いて見せろよ！！」

「・・・知った口を利くんじゃないよ！！ガキの癖に！！アンタが考えているほどにこの学園都市は真っ当なもんで作られたおとぎの国（ネバー・ランド）じゃねぇんだよ！！こうして高位能力者であるとも一度その闇（そこな）の深（しぬま）みに嵌れば、待っているのはこんな末路なんだよ！！アンタのような、なんの力も、後ろ盾もスキルもない学生（ガキ）が出しゃばっていい世界じゃねーんだよ！！」

麦野は激昂していた。どいつもこいつも知ったような口を聞く。やれ助けてやるとか、手伝ってやるといいながら目当てなのはその能力（パワー）と美貌（カラダ）のみ・・・

例えコイツが本気で私を助ける気があっても所詮ＬＥＶＥＬ５とい

う畏怖と恐怖の移り火でその身を焼かれるのが落ちだ・・・・

青白い顔を夜叉のようにしてこの男をこの空間から出そうとする・・

・・能力は使いたくないし、安定していない・・・・一言でいえば使えない(レベル0)のだ

・・・・出血多量で簡単には動けない、腕力を持ってしてでも足りない・・・・どうするか・・・・

しかし、本人は気が付いていなかった・・・・傷口に添えられていた掌から感じる人肌の温もりがいつの間にか心地よかったこと、精神が不安定とはいえこうも赤の他人と感情を素直に露わにして話したということに・・・・

（・・・・このままでとても持たねぇ・・・やっぱり、無理にでも病院に・・・・）

と思い上条は再び右ポケットに入っている携帯電話に手を伸ばした。幸いいつもの如く壊れてはいないようだ・・・・そのささやかな幸せを噛み締めつつも希望への三つの数字をプッシュする・・・・

しかし、ただこの男曰く付きの・・・・いやある意味”こういうこと”に関しては折り紙付きだ・・・

―バシュッ―

光の光芒が愚者の羅針盤を砕く音が・・・・・

第三話・・・・ここにあなたがいるから・・・・

刹那・・・上条には何が起きたかよく理解できなかった。気付けばもうコールボタンを押すばかりで者数分でこの危機的状況から脱することが出来かつ恐らく現段階で唯一の望みの綱が断たれたのだ・・・・

それも背後から来た怪光線によって・・・・・・

液晶どころか上半分を綺麗に根こそぎ持ってかれた・・・だがそれが何かはわからないもののこの状況を作りだした関係者(とうじしゃ)に間違いなさそうだ・・・・そう直観的に悟った上条はゆっくり立ち上がり後ろを振り返った・・・そこには・・・・・

「…えっ？」

地に伏している麦野沈利（ヴィーナス）に姿かたちまるで複写機でそのまま写した瓜二つ（フェイク）の人間だった・・・・

「本演習の実行に先立ち被験者麦野沈利に忠告したことを、被験者麦野沈利本人が認識していないあるいはその判断に著しく欠けると見なされましたので侵入者に対し再度説明、及び命令をだします。」

「本演習は学園都市条例第７４条第５項に従ずるものであり、また本件は学術協定における機密レベル６相当の重要事項であります。すみやかに、本件に関わりの無い侵入者・上条当麻にはこの地点から半径５００ｍ圏外へ退去しなさい。本命令は学園都市条例第１５条第３項によって遵守されうるものであります。」

目の前の少女（もぞうひん）は感情を一切も感じさせない、加えて相手の返答です

ら押し込めてしまうほどの威圧感をこめた無機質な声を発した。

相手は人間の皮を被ったサイボーグだ・・・・思考パターンや行動形式をどれだけ真似ようとも、幾重にも張り巡らせた思考系統で理性にのっとる判断をしても・・・・・所詮傀儡は操り糸を持たれ術者に引っ張られているだけだ・・・・それはサルとその曲芸師の関係に類似している。

ただ、そうだからと言って相手を簡単に退かせることもましてや排除することも難しい・・・どうする？

「・・・げろ・・・・に・・・・・げろ・・・・逃げろ！！」

少し思案している最中、もう向こうは先手を打ってきたようだ。光のアイスブルーの槍が迫ってくる。少女の声に気がつかなければ・・・・だが、自分は丸腰だ・・・・どうする・・・・

「逃げろって言ってんだよ！！分かんねぇのかぁ！！アイツは、私と同じＬＥＶＥＬ５相当の能力を持っているんだよ！テメェなんざ、相手にできるような奴じゃねぇンだぁ！！」

ＬＥＶＥＬ５相当・・・一瞬身をすくめたが、思考が動きを止める・・・まてよ、

ＬＥＶＥＬ５ってことは相手の放つ理屈も名前すらも理解できないビームの類だろうとも・・・

――・・・・この不幸(ミギテ)で眼の間に来る原子崩(いのうのちから)し打ち消せるはずだ・・・・―

その結論に至った刹那・・・・

―・・・・・・閃・・・・・・・―

電柱並に太い光の軌跡が上条を捉える・・・・

「・・・・!?」

白煙と土埃が撒き上がり、周囲の視界を遮る。昼間でさえ暗がりの多い路地裏、それに加え今は日没に達そうとしている時間帯。光源もなく、先ほどのやり取りがどうなったのか分からない。ただ麦野は自分の死がほんの少しだけ伸びたにしか過ぎない・・・とそう淡々と感じていた。だが、一方で初めて言われた「生きろ」という言葉にどうしてか胸の締めつけられる思いを感じていた・・・・

理性で、脳ではこの状況を正確に理解できているのに何故か胸の奥がキリキリと締めつけられるように痛い・・・・思考と心は連結し、その結果は少なからず身体機能特に感覚器官に影響を与えることは分かっていたが、このことが表すことは一体何だったのだろうか？

この思いを麦野沈利は理解できなかった・・・・・

アイツは、私に最後まで生きろといった・・・・けど、私には何もせず生き恥を晒す様なマネはできない・・・・

アイツには悪いけど、私は曲りなりにも学園都市の頂きを冠するＬＥＶＥＬ５（ようのうりょくしゃ）・・・・こんなやらっれぱなしは性には合わない・・・・なら悪あがきでも、何でも・・・そうねアンタの仇討（ち）でもいいわ・・・・アイツだけはどんなことをしたっても始末する・・・・

それが、私らしい”生き方”だから・・・・・

「・・・・・ッケホケホケホ、危ねぇーマジで死ぬ五秒前だったぜ・・・・・」

「・・・・・っは？」

死んだと思われた超がつくお人よしはなんと生きていた・・・・それも無傷で・・・・・

・・・馬鹿な、アイツは今私の超能力（メルトダウナー）を喰らったんだぞ？生きている訳がない！・・・・まさか、こいつはなんかの能力者なのか？・・・・・

「・・・・・はぁ、なんか鳩が豆鉄砲喰らった様な顔してんな・・・・うんうん、そういう表情もできるんだなお前。いい顔しているしなんか、可愛いよ」

・・・かっ可愛い・・・・・・

麦野の低体温気味の体が内側から、心臓の奥底から温かみが湧きでてくる・・・そして顔にも血液が昇り、心臓も先ほどの痛みとは違った痛みを伴って力強く拍動する・・・・

よく、ホスト崩れのチンピラや無能力者集団の馬鹿ども、見るからに下ごころ丸出しの猿みたいな年中発情野郎とかにいろいろ外見で賛辞を受けたりもするが、そのどれもが気味悪く生理的嫌悪感を感じざるを得ないものばかりだった。

だが、このなんも変哲もない其処ら辺の学生から言われた一言がこんなにうれしく、甘酸っぱく、そしてドキドキしてしまうのだろうか・・・・・

だがこんなぬるま湯につかった様な感情を弄ぶ術を知らない麦野は照れ隠しに能力を放ってしまう・・・

「・・・・オウッ・・・・・」

上条がかざした右手に今しがた放った光芒が、音を立てて・・・まるで何かが崩れるような音を立てたのち打ち消されていった。

「・・・・・私の、・・・・原子崩しを打ち消した・・・・」

今は不安定で能力がフルで使えないとはいえそこそこの威力で撃った・・・演算も何もかも完璧・・・なのにどうして？・・・・

少年は、すこし驚いて腰を抜かしている少女を見やると着ていた学ランを羽織らせてそして目線を合わせて、二カッと笑みを浮かべた・・・・

「・・・・今は時間がねぇーけど、コイツが片付いたら後はいくらでも質問受けてやるからさ・・・それまでは痛いかもしれないけど

待ってくれよな・・・ほんのあと少しだからよ・・・・」

上条は麦野を負担のかからないような姿勢にさせると、衣服に付いた土埃を払いながら立ちあがり奥にいる敵（コピー）を見据えた。

「・・・・そういえば、テメェだけ一方的にオレの名前を知っているのはすこし気味が悪いが良かったら名前ぐらいは教えてくれないか？」

路地の先にいる麦野沈利はその無機質な瞳を上条に向けると興味無下げに、事務的に抑揚のない言葉でこう返した・・・・

「・・・・推測通（シュミレーション）り、殲滅対象には効果見られず。戦闘パターンをリスト１１５４からリスト７８９５に変更。実行開始を申請・・・・・許可完了・・・・実行・・・・」

「・・・・やっぱり、機械だから関係無いやつには全く返答もしない仕組みなのか？」

上条は腰を落とし身構え拳を突き出す・・・・所詮素人の域だが、その経験に裏打ちされた何かが上条のその構えをスキの無いものにする・・・・・

「私たちには、思考パターンによって集積されたＡＩではなく独自で思考し結果を導くような自律式の電子頭脳を持っています・・・そこで判断された結果あなたに対して何かしらの情報提供は無益だ

と認識しあなたの応対に応じないと決定したからです。それに・・・・」

「・・・・それに？・・・・」

「これから敗れるあなたに何かを知らせる価値も見い出せないと判断したからです・・・」

無表情の彼女の顔が冷笑を湛えたのは気のせいであったのだろうか？その無機質な仮面に色彩が宿ることに、そしてそれが例え作られていうものであっても他人の、本来の麦野の持つべきものを無断拝借して使っているようにしか、上条は思えなかった・・・・

「前言撤回だ・・・・サイボーグ・・・・お前には無機質なものがお似合いだ、そのままでいい・・・・」

「・・・・・っは？」

「勝手に麦野の笑顔を我が者の様に使うっていうんなら・・・・・」

「・・・・他人を勝手に真似て本人(オリジナル)を消そうっていうんなら・・・・・」

「まずは、その幻想をぶち殺す！！！」

日が傾き両者の顔を夕日が舐めるように照らす・・・・そして共にそれぞれの思惑のために、雌雄を決するために双方同時に飛び出していった・・・・・

Ｐｈａｓｅ　３．０：ｄｅｌｉｖｅｒ

表の学生（レベル０）と裏通りの女王（レベル５）が邂逅するとき・・・・物語は始まる・・・・

Phase 3．0：deliver（後書き）

これから更新が遅くなるかもしれませんが宜しくお願いします・・・・

一応、この小説のストーリは大枠が決まりました・・・・

あとは、作者の都合次第、書くだけで・・・・

でもそれに力量と表現能力が追いつけるかどうか疑問ですが・・・・

ご意見・感想等待ってマース・・・

Phase 4.0：enter－tain

原子崩し(メルトダウナー)の光芒が迫る。それを、上条は抜群の危機察知能力で避ける・・・

相手も直線から、原子状態の位相を狂わせ追尾させるがそれでも件の右手(イマジンブレイカー)で掻き消される

上条が瞬間的な脚力の爆発で距離を詰める・・・そして足払いと同時に拳で応酬する。それを足元を原子崩しでブーストさせて後退させる・・・まさに一進一退の攻防が路地裏の狭い道で繰り広げられる・・・・・・

互いの武器はビーム(ちょうのうりょくげんせきのちから)と拳・・・だが、その戦いぶりは共に長剣(サーベル)を構え、細長(ろじうら)いピストで互いの手の内を読み激しい攻防をする中世の決闘の如くであった・・・・

Phase 4.0：enter－tain

「はぁ、はぁ、はぁ、・・・・やるじゃねぇかモノマネ野郎(さいぼーぐ)」

「・・・・殲滅対象にしては中々に生きがいいですね・・・・レベル0にしては規格外のものです・・・この動きをリファリングして汎用させたい・・・・殲滅対象上条当麻を”保護”対象に変更・・・」

「オイオイ・・・保護ってどう意味だよ？まさか、実験材料とかいうんじゃねえだろうな？」

「・・・・正解です。正確に言えば、あなたの脳髄・脳幹を右手の交感神経および運動神経と繋がったまま鮮度がいい状態で”確保”するという意味です」

「・・・・ってそれは死んでいるんだろう？」

「いえ脳を含めた必要な生体組織は生きたまま採取しますので正確には死ではないかと・・・・」

「もう人間のかたちしてねぇだろ！！それ？」

「サンプルは人の形をする必要性があるのかとサンプル番号Ｌ－０５６に問います・・・・」

「俺はすでにサンプル扱いな訳ね・・・・・・」

上条は嘆息する・・・やはりいつも通り不幸、いやそれ以上にツケが廻ってきた形だ・・・しかし、こんな丁々発止なやり方ではだめだ・・・・どこか決定的なダメージを与えてこの場を早期に脱出しないとアイツが持たなくなる・・・だから、この無駄な闘いを早く終わらせる必要がある・・・・

見ると、さっきよりも顔が心なしか青くなっている。元々の肌の白さを考慮すればそれは蝋の様な色だ・・・同じ白なのに生が感じられない白さ・・・・

あの時から誓った・・・二度と命を失わないように・・・・

・・・・こちらも、迅速に決着を着けなければ・・・やはり力場が安定していないのが原因でしょうか・・・・ならば、仕方が無い・・・・まだまだ不安定ですがコレを使いますか・・・

上条は駆け出す、そして考える勝利条件を・・・何度かの打ち合いで気付いたことは相手のビームが連射不可能ということ、次に狙いを正確するには時間がかかっているということ・・・・

もうひとつは・・・・右手ではなく、今度は左拳のフックをくり出す。しかも右手を振りかざしてフェイントするように・・・・

「！！」

そう、必ず相手は自分が至近距離で攻撃すると後ろに下がって距離を保とうとする・・・・恐らくこの光線を至近距離で打つことが不可能、もしくは懐に入ると肉弾戦は不利・・・・ならば、

これは賭けだがやる価値はあるかもしれない・・・・・上条はあることを考えていた・・・

突如、エネルギーが収束する・・・・この張りつめた空気は先ほどの感じとは比較にならない。重くて相手を圧殺しかねない鈍器のような重量感・・・・そしてムギノシズリが右手を振る・・さっきとは桁違いの威力で、攻撃範囲も広く、毛並みも違う光線が放たれる・・・そして光が八方向へと拡張していた・・・

―粒機波形高速砲オクト―

麦野は戦慄する・・・あれを使いだすと能力の制御はおろか演算が

困難を極める・・・・それに、身体そのものが反動で持たなくなる・・・・

勿論直線的に延びるだけではない・・・自分は曖昧な状態の電子が形成している異なる位相の波連同士を強制的にコヒーレントにして繋げているにすぎない・・・だが、さっきの応酬でもわかるように自分の偽物は射出後の原子崩しの位相さえもコントロールして対象を追尾しているようだ・・・・

ならば、この仮定によって導かれる答は唯一つ・・・・

「避けろぉ！！！ガキィ！！」

そう、八つの光（ヤマタノオロチ）の槍が鎌首を上げ一気に振り落とされる・・・・まるで神話の勇者の息の根を止めんとする為に・・・・

しかし、勇者は違った・・・十束剣は持っていないがそれに相当する拳を持って・・・男は正面から対峙する・・・・

「――――――！！！――――――――」

女の声にならない声と、閃光と・・・その次には爆音と粉塵が撒き

上がる・・・・・

しかし、少年は跳躍する。そしてムギノシズリの懐へと入り込む、右こぶしを高らかに挙げて・・・

だが、相手はそれを見越したかのように左手に鷲掴みにされた札束の様なもの空間中にばら撒いた・・・

・・・・・左手の掌に集めたわずかな原子崩しを収束させる・・・・・

刹那、ムギノシズリは嗤った・・・人を喰らった夜叉の様な凄惨で醜い・・・けど品のある笑みを浮かべて・・・・・

５×０＝測定不可能

ファースト・ストライク

ズドドドドッ・・・・ドオン・・・・・・・！！

ビル群が崩れ轟音と砂埃を上げる・・・・コンクリートの穂首を根こそぎ狩るような光芒（かま）・・・・

それは死神の持つ鎌よりも獰猛で、そして無慈悲だ・・・・・

「・・・・中途採用したミッションは達成されず・・・しかし初期段階での目標は完遂・・・殲滅対象を切り替え演習を続行しまス・・・・・」

突如、ムギノシズリは足首を掴まれる・・・・そこには先ほど拡散（シリ）支援半導体（コンバーン）の誘爆と原子崩しの八連発を食らったはずの上条当麻（ターゲット）だった。

すぐさま演算を試みるが・・・脳（コンパイラー）にはコードが書き上がらない・・・・能力が行使できない！！・・・しかも体内の”連結”が維持できない・・・・このままでは力場が安定せず、”晶化”が維持されな

い・・・・・

まさか、この男の右手がＡＩＭ拡散力場を不安定にしているというのか・・・・・

咄嗟に、膂力を持って男を力一杯踏みつける・・・・だが、少年は益々強まるばかり・・・・

「・・・・放さ、放しやれェェエッ！！目標、維持・・・・狙撃対象・・・・エン習ゾッ行・・・・フかＮｏＵ・・・・・・・・・」

「・・・・思った通りだぜ、やっぱりお前は体構造がそのまま異能の力・・・・ならば俺が体の一部のどこかに触れればいいよな？」

ムギノシズリは初めて、感情を学んだ・・・そう”恐怖”という感情を・・・・目の前の男は書庫（バンク）の情報では単なるＬＥＶＥＬ０・・・

・其処ら辺にある道端にある石ころと変わりない・・・・

なのに、どうしてこんなに自分は震えているんだろうか・・・・・・

・

「・・・・喋ってもらうぜ・・・どうしてアイツを傷つけたのか、

なんでお前がアイツと瓜二つなのかということをな・・・・」

だが、話は途切れる・・・人間という動物は認識できる次元が決まっており大抵は三次元、計算したり論理的に物事を考えても二次元が限度だ・・・勿論課題を複数個同時にこなすこともできなければ話を聞けるのも自分を含めて二人が精一杯・・・・時間がかかれば尚のこと。その話を集中して聞けるかも怪しくなる・・・・

故に会話には第三者の横やりが入ってしまうと中断、もしくは会話している人間が覚えているところまでしか戻すことはできない・・・

・・

ただ、今回の横やりは・・・・槍は槍でも”曖昧な”形で放たれた原子の収束体だ・・・・

そして、会話は片方がいなければ修復不可能だ・・・・・そう、相手は永遠に失われた・・・

最期に上条が見たその顔は、その個体が初めて見せた人間らしさ、感情の吐露だった・・・・

その表情は皮肉にも今しがた覚えた最初で最後の感情・・・・恐怖であった・・・・・・

かくして、敵は去った・・・上条が考える最悪の形で・・・・

音を立てて崩れる、其処にあるのは三角柱型の褐色の割れた結晶だった・・・・

「・・・・アンタも使えるじゃない、つーか、アレ喰らってよく死ななかったわね？」

そこには血を流しながらも優雅に立つ麦野沈利（あんぶのじょおう）だった。

「・・・・なんで、なんでだよ・・・」

上条は血を吐くような、絞るような声をだした。自分も先ほどの攻撃である程度の光線は右手で塞いだもののガレキで頭や体を打ちつけては切ってしまい、全身血だらけの上、着地ミスによる足の骨折もしていた。

それでも立ちあがって正面を見据える・・・・相手の誤ち（げんそう）を正すように・・・・

「は？なんでって、仕事よ。し・ご・と。アイツをぶっ潰すのが今回、私に課された仕事だったのよ」

「・・・・・仕事だと・・・・・」

「そうよ、本来暗部の仕事を知られたその時点で相手はブ・チ・こ・ろ・し・確・定、何だけど・・・今回は手伝ってもらったから特別に見逃してやるわ・・・・」

「・・・・どういう訳だよ、俺は暗部の仕事もしらないしこの学園都市がどうして本来あるべき何かを欠如してしまったことも分からない・・・それにお前が今ある地位につくのにどれだけ苦労したか・・・・何と無くは分かってもそれ全てを分かりきったような口は利けない・・・・」

「・・・・一体、何が言いたいの？簡潔に言ってくれない、身のこなしの良さや戦闘中の頭の切れはどこにいったかにゃーん？」

「・・・・俺が言いてぇのは、なんで敗北が分かっている相手を追い込(ころした)んだだよ！！」

「仕事って言っても一緒か・・・あのね、相手は感情も全てプログラムによって理路整然に作られた模造品なのよ・・・・所詮、どん

なに人の姿や表情、思考パターンを完璧に真似てもどこまで行っても機械は機械・・・・アンタは掃除機が壊れてもそこまで感情的になれるのかしら？」

秀麗な眉を綺麗に曲げ、たおやかな指を頬から顎にかけて添える・・・・眼は上条を捉えているが目そのものはどうでもいいような、投げやりなかんじで見据えられている・・・・

「けれど、アイツの最後の表情は怯えていた！！あれはれっきとしたアイツがもっている感情だ！！それを、お前は踏みにじった！！」

「・・・・はぁー口で言っても分からないなんてね・・・・でもいいわここで始末するのも悪くは・・・・ウッ・・・・」

突然の激しいが麦野を襲う。嘔吐感もせり上がる・・・・先刻受けた傷と今までの疲労が次第に体を、心を蝕んでいた・・・・

そして、麦野沈利（あんぷのじょおう）は地に伏した・・・その瞳映ったのは先ほどまで自分を激昂した男の、心から心配したような、沈痛な、悲しみの表情だった・・・・

その時、麦野はそこはかとない淋しさを・・・・感じた・・・・

第7学区、とある病院集中治療室・・・・・

医者は嘆息する・・・いつもの上条当麻(おとくいさん)が自分の内線に電話を掛けてきたときはびっくりした・・・いつかは忘れたがこうも怪我ばかりの無茶ばかりで入院されても困るしそのたびに外来に飛び込まれたら迷惑だからという理由で渡した電話番号がこういう形で使われるとは・・・・

今回も人助け・・・しかも双方出血多量の重傷・・・上条は去ることながら連れてきた紅茶色の髪の少女は危険だ。原因不明の意識障害・・・能力の過度の行使による神経組織の裂傷と一部の断裂・・・加えては僅か数例しか確認されていない難病の兆候・・・・

一体どれだけ過酷な時間割(カリキュラム)りと実験をこなせばこうなるのだろうか？

ガラス窓の向こうにある無菌ルームには年端のいかないまるで自分の孫娘の様な少女が安らかに眠っていた。全身を機械に繋がれ、世に言うスパゲッティー症候群状態・・・・・

今晩が峠だ・・・・でも、自分はどんな手を使っても助ける。それが己の、医者としての、使命でもあり矜持だからだ・・・・・

それは彼の通り名にも顕われている・・・・その名は冥土帰し(ヘブンキャンセラー)

学園都市きっての名医であり、表と裏を知る男であった・・・・・

とある病院一般個室病棟、通称「とある少年の別荘」

上条当麻は今日一日あったことを順に思い起こしながら窓に映る月明かりが照らす室内を、壁を、風景を見ていた。

路地裏での会敵、初めて見たＬＥＶＥＬ５の圧倒的な力、暗部の仕事、自分が住まいし学園都市の深い闇、恐怖に歪んだ表情、少女特有の無垢な表情・・・・・

そして、最後に見せたアイツの悲しそうな、何かに耐えるような、訴えかけるような瞳・・・・・

自分は、そんなに頭がいい方でもなければこうやって物事を煮詰めてもいい考えが浮かぶようなタイプでもない・・・・けど今はこうしていないと自分を保てない・・・思い返せば、本当に一歩間違えれば自分も彼女も今頃、燃えカスになっていても可笑しくはなかったのだから・・・・

一体、これから自分はあの麦野沈利という、少女とどう接していけばいいのだろうか？

いつもなら助けた相手とは連絡先を交換し、偶に互いに連絡を取り合う程度で全てが解決していた・・・ただ今回の一件はそうもいかない・・・・

いつしか、上条の心の中には彼女を助けたい、暗闇から救い出したい・・・・今までの感情とは何か違う・・・こう全てから彼女を解放させたいという想いに溢れていた・・・

どうしてこんな気持ちをいだくのだろうか？彼女が美しいから？その瞳や過去が、上条の預かり知らぬ所で絶望に縁どられているから？

まだ、自分の感情に着地点を見いだせない・・・なんか白く靄がかかり答が見えない様な・・・そんな感じがする。

この日、上条は答が単純でけど見つからない疑問に永遠と苦しみ、思考のループにかかる・・・それは一晩中続き、知恵熱出して翌朝倒れたのは別のお話・・・・

それを見て、冥土帰しはいや、青春だね・・・少年恋せよだなとか看護師とコーヒー片手に話していたそうな・・・・・

？？？？

ここはどこかの書斎の様だ・・・・センスのいい重厚な机に、多くの蔵書を納めた本棚。背後には学園都市の夜景が一望できる大きな窓・・・・机の上には何枚もの書類が山積みにされてはいたが、誰かによって丁寧にファイルに整頓され机の上には四枚の書類が並べてある・・・・柔らかなバースタンドの間接照明からそのプリントが照らされる。どうやら、ある生徒の経歴、実験データの様だ・・・・

全てが暗号化され、無数のアルファベットと数字の文字列となっている。だがこの部屋の主はその記号群を苦もなく読みとる・・・手にはコニャックの入ったグラスを、もう一方は気だるげに顎の下に添えられて・・・・・

「ふーん、興味深い。実に興味深い・・・・これだけの短期間でこうも容易く結果が出るとはね・・・やはり先行投資（レプリカ）は役に立ったようだな・・・・」

人物は、自身の予定に狂いが無いことに喜んでいた。いや正確に言えば規定事項の確認というところだろうか・・・・

「・・・・にしても、楽しませくれるな彼らは・・・・まだまだ伸びる余地もある・・・・本当に楽しみだよ・・・・」

男は空になったグラスを机の上に置く・・・・・グラスの中の氷はそのままで・・・・

部屋の主は外出したようだ・・・・・・・・・月明かりが暗闇に包まれた部屋を照らす・・・・・月明かりに映ったのは先ほどの書類・・・そこには麦野沈利、上条当麻と書かれそれぞれの顔写真が印刷されていた・・・・・・

これから始ることは今までの出来事に比べれば前戯にしか過ぎんのだよ・・・・・

残ったのは、月明かりと氷と、・・・・・ある人間の野望・・・・・・

Phase 4.0：enter－tain（後書き）

もう書くしかない・・・そんな状態です・・・

さぁ、バイトだ頑張ろう・・・・・

皆さんの好きな禁書のストーリーは何ですか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2309ba/

5×0＝測定不可能

2012年1月14日08時45分発行